

は
ら
ぺ
こ
テ
ー
ラ
ー

昔々有るところに仕立て屋を営む三兄弟が居ました。

長男のカミューが仕立てを。

次男のギヌターヴが接客を。

三男のアルフォンスが家事一般を。

これは三人で支え合いながら生活する或る庶民のお話。

第一章 仕事の一日

ある日の事、朝起きて部屋で着替えるなり朝食も食べずに仕事場に向かおうとするカミーユの首根っこを、パンの焼ける匂いのする台所から顔を覗かせたアルフォンスの、細いけれども力強い腕がすかさず掴んだ。

「カミーユ兄ちゃん。仕事は飯食ってから」

「あれ？ 食べなかったっけ？」

「そんなにお腹鳴らしながら良くそんな事言えるね？」

アルフォンスの言う通り、ほかの兄弟二人と比べて華奢なカミーユのお腹が、きゅるきゅると鳴っている。

毎回の事なのだが、仕事が大詰めを迎えると、カミーユは寝食を忘れて作業を続けるので、弟のアルフォンスとギュスターヴの二人で時計を睨み付け、作業のきりの良い所で引きずってきて食事を食べさせ、寝かし付けるのだ。

肩の下まで伸びた髪を紐で束ね、バンダナで前髪を上げながらカミーユは台所の隣に有る居間へと入る。

テーブルの上に乗っているのは一枚のディッシュに盛られた目玉焼きと、マッシュポテトと、ベーコンの入ったほうれん草のソテー。

それからカゴに入ったきつね色のブレッドと、カリカリに焼かれたバゲットだ。

「兄貴、早く飯食おうぜ」

既に椅子に大柄な身体を預けているギュスターヴがそう声をかけると、カミーユとアルフォンスも席に着く。

指を組み、食前のお祈りをし、それから各々料理に手を伸ばす。

黙々とほうれん草を食べるカミーユの様子を少し嬉しそうに眺めながら、マッシュポテトを食べるアルフォンス。

ふと、後から後からブレッドに手を出すギュスターヴに、アルフォンスが手をはたいて言う。

「ギュス兄ちゃん。パンばかり食べないでほうれん草も食べる！」

「えー、俺はうれん草嫌い」

「嫌いでも食べる！」

そうしている間にもカミーユはディッシュの上の物を食べ終え、パンには手を着けずにそそくさと席を立とうとする。

すると今度はアルフォンスがカミーユの腕を掴む。

「カミーユ兄ちゃんはパン食えよ！」

「えー。僕ブレッド嫌い」

「だからバゲットも用意してんだよね？」

とにかくパンを食べないと仕事をする体力が付かないだろうと、もう何度目かも解らない説得をされたカミーユは、渋々バゲットを嚙る。好き嫌いは諸々有る様子だが、庶民にしては比較的裕福な食事を食べられるのも、カミーユのおかげだと言う事を他の二人は解っている。

この三兄弟は両親の後を継いで仕立て屋をやっては居るが、裁縫が出来るのがカミーユだけなのだ。

本来なら、何人もお針子を抱えて数人がかりでやる様な依頼でさえ、カミーユは一人でこなし、尚且つ納期も破らない。

その状況を作っているのは、無茶とも言えるようなカミーユの労働状況だ。

朝早く起きてすぐに仕事に取りかかり、作業の手を止めるのは出来上がった時か、日付が変わる直前辺り。

『別に辛いと思った事は無い』そうカミューはいつも言っているが、時折顔色を悪くしたり、溜まっていた仕事を片付けた後に泥の様に眠ったりしている兄を見て、ギュスターヴとアルフォンスは心配を隠せない。

けれどもカミューはこのスタイルを崩す事は無いのだろう。

だから、なるべく力が付くような料理を作るにはどうしたら良いのか、アルフォンスは何度も町医者に聞きに行っている。

そんなアルフォンスの努力の結晶である朝食を食べ終わったカミューは、手を軽く拭いてそそくさと作業場へと向かう。

同じように、何とかほうれん草を口に詰め込んだギュスターヴも、先日出来上がったばかりの依頼の品を届ける準備をしようと席を立ち、兄達の食事が済んだのを確認したアルフォンスは、食器をカゴに入れて街中にある水場へと食器を洗いにしかけたのだった。

カミューが仕事場に籠もって数時間。

ひたすらに針と糸で布を縫い合わせる作業を続けている。

布を裁断する為の作業台が四台ほど置かれ、一人で使うには広すぎ

るのでは無いかと思われる作業場。

そこには明かり取りの為に大きな窓があるのだが、陽の光は布を傷めてしまう。なので、窓には薄手のカーテンが掛けられていて柔らかな光が仕事場を照らしている。

窓の外から聞こえる街の喧騒。それと、微かな衣擦れの音に包まれながら、作業台の内一台に布を乗せてカミューは口を開かずじただただ手を動かす。

布の一片を縫い終わり、一旦糸の通った針を針山に刺した所で声が掛かった。

「兄貴、採寸の仕事だよ」

その声を聞いてドアの方に振り向くと、そこにはドアを開け、いつの間にか後ろに立っているギスターヴの姿が。

「わかった。今行く」

手元にあった布の塊を、床に付かないよう注意しながら作業台の上に置き、カミューは作業場を出た。

たっぷりと入る陽の光を少しだけ和らげる為と、目隠し様に用に薄

手のカーテンが掛けられた採寸専用の小さな部屋で、カミューはコルセツト姿になった婦人の身体に巻き尺を当てて居る。

「アヴェントゥリーナ様、今回はどの様なご依頼で？」

「あのねー、新しいドレスを作って欲しいのよ」

「それは解っているの、どの様なドレスかというのをお訊ねしているのですが……」

アヴェントゥリーナの話の詳細を聞いてみると、クリノリンドレスを作って欲しいとの事なのだが、フリルやレースは控えめで、スカートの裾にワンポイントで大きな花の刺繍を布と近い色の糸で入れて欲しいという。一見華美では無いが、よく見るとその繊細さがわかる、粋な物が欲しいらしい。

それは実に、普段から少し変わった注文をする、アヴェントゥリーナらしい要望だ。

カミューは頭の中で、どの様なデザインになるのか、それを思い浮かべながらメジャーで測った数値をメモに書き込んでいく。

「なるほど。」

ギュスターヴはどれくらい納期を提示致しましたか？」

「あの子が言うには、他のお仕事もあるから三ヶ月見て欲しいって事だったけど、カミュー君が刺繍もするんでしょ？」
半年位かかっても構わないわよ」

「承知致しました。善処します」

そう話をしている間にも採寸とデザインの確認を終え、カミューは作業途中の依頼品を完成させようと作業場へと向かった。

作業場に付くと扉の前で、エプロンを着けたまま腕を組んでいるアルフォンスが待ち構えていた。

カミューが何事かと一瞬足を止めると、すかさずアルフォンスが首根っこを掴んでこう言った。

「カミュー兄ちゃん。昼飯」

カミューは反論する事も出来ず、ずるずるとアルフォンスに居間まで連れて行かれてしまう。

食事をする時間があるなら作業をしたいとカミューはいつも思っているのだが、その事をアルフォンスもよく解っているようで、昼食は簡単な物だ。

挽肉を入れ、トマトとポテトを裏ごしして煮た物にバターを一欠片入れた、人肌位の温度のスープ。

大きめな木の器に注がれたそのスープを、カミーユはお祈りをしてから直接器に口を付け、喉を鳴らして一気に飲み干す。

それから、口の周りを手の甲でぬぐい、それをハンカチで拭いた後、器を置いたカミーユはそそくさと仕事場へと向かい、少し陽の入りが変わつた作業場で作業を再開する。

仕事がある時のカミーユの昼食は、いつもこんな感じだ。

場合によっては夕食もスープだけ。

こんな食生活が続ける、自分よりも小柄な兄を見て、アルフォンスは早く休日が来れば良いのにといつも思つて居る。

自分達の生活を支える為に懸命に働いているのはわかるのだが、それでも心配になってしまうのだ。

カミーユの休日は依頼品を全て片付け、次の依頼が来るまでの期間だけ。

安息日ですら、片付いていない仕事があるとおちおち休んでいられないと言って作業をするのだ。

安息日の朝のミサに出た時に、何度か神父様から『もう少し休んで良いんだよ』と言うお言葉を頂いては居るが、どうにもカミーユは休むというのが苦手らしく、ミサの後にも仕事をする。

何時の事だったか、ギュスターヴがカミーユにもっと休みを取れと言った事がある。

するとカミーユは苦笑いをしてこう言った。

「それはアルに言ってよ。」

あいつも毎日家事やってるんだから」

「アルは安息日は適度に手え抜いてるし、兄貴程無茶やってないかな？」

「別に無茶はしてないと思うんだけどなあ」

「自覚無いのか……」

その時も、不思議そうな顔をした後、カミーユはまたすぐに仕事へと戻ってしまっていた。

日も暮れ、ランプの明かりだけが仕事場の中を照らす。

昼間に比べて数段暗い作業場で、目を凝らし、ちっと針と布を見つめな

がら作業をしていたカミュー。

ふと、糸を切り針を針山に突き刺した。

今縫っていた依頼品が出来上がったのだ。

一息つき、壁に付いているフックに有ったハンガーにその服を掛けた瞬間、何者かがカミューの首根っこを掴んだ。

「兄貴、晩飯食おうか」

「えー。もう日付変わってるし寝たい」

「寝る前に食え」

寝たいと言いながらもくるくるとお腹を鳴らすカミューを連れて、ギョスターヴが居間へと入る。

するとそこには、コーンを裏ごしして作ったスープに溶き卵を入れ、溶かしバターをかけた人肌のリゾットが待っていた。

第二章 欲しい物

先日受けた依頼のパターンを引き終わり、材料の買い出しに出かけ、賑やかな商店街の店先を流し見するカミューの目に、有る物が留まった。

それには『ミシン』と言う看板が付けられていて、机の上にコの字型の、針が付いた黒いカラクリが据えられ、机の下には大きな板が付いている。

どういう物なのか疑問に思ったので説明を聞く所によると、手で縫うよりも早く布の縫製が出来るのだという。

その説明を聞いて、そう言えば最近仕立て屋仲間の間でよく名前を聞く物のような気がしたのでよくよく思い出してみると、周りの仕立て屋はミシンに反対する者ばかりだった様な。

なんでも、この様な機械が一般的になると、手縫いで服を作っている仕立て屋達の立場が脅かされるからだと言っていた気がする。

その話が出た仕立て屋の会合の時に、カミューはミシンがどういう物なのか良く解っていなかったが、喧々囂々とする他の仕立て屋にこう

言つた記憶がある。

「ミシンが普及したとして、僕達の仕事ってそんなに減るかな？」

まだミシン自体に対する信頼もそんなに築かれてゐる訳じゃ無いし、手縫いの方が良いって言うお客さんは沢山居ると思うよ。

それとも、そのミシンって言う奴が普及すると仕事が貰えなくなるって心配する程自分の技術に自信が無いの？」

普段はぼーっとしていて余り意見を言わないカミューの意外なその言葉に、他の仕立て屋達はぐうの音も出なかった。

そんな事が有った訳だが、カミューは仕事を早く進められるならと、ミシンに興味を持つ。

店頭でミシンの試し縫いをさせて貰つたりした訳なのだが、針を動かす為の板を踏むのにはコツが要る様だ。

何度かカタンカタンとミシンを踏んだカミューは、ぼんやりとミシンが欲しいなあ。と思つたのだった。

行きつけの布問屋で手触りの良い、しかし光沢は押さえられている絹の布を買い、糸問屋で布と同じ色をした絹の縫い糸と、それよりも

少しだけ太い艶やかな刺繍糸を買い、カミューはすぐさま作業場へと荷物を運び込み作業を始めた。

これから作るのは、先日採寸をしたお得意様のアヴェントウリーナのドレスだ。

作業台の上に布を広げ、隙間がなるべく出来ない様に、それでいて布目が歪まない様に型紙を置いて細いシルクピンで留めていく。

一頻りピンで留め終わり、これから裁断しようと、大きく無骨な裁ちばさみに手を伸ばした所で、首根っこを捕まれた。

「兄貴、裁断の前に昼飯な？」

「別に裁断してからご飯食べても……」

ギュスターヴの言葉にカミューはそう返すが、早朝に食事をしたつきり、昼時どころかおやつ時になるまで何も食べていなかったカミューのお腹は切なそうにきゅうきゅうと鳴っている。

「兄貴の『これやってから』を許容してるといつまで経っても飯食わないだろ。

だから今食え」

ギュスターヴにそう言われ、確かにそう言う傾向はあると言う自覚

のあるカミーユは、素直に居間へと向かう。

居間に入ると用意されていたのは、キャベツとトマトをざっくりと切つてベーコンと一緒に煮込んだスープと、薄めにスライスされたバゲットの上にコーンとほうれん草を乗せて粉チーズを振りかけて焼いた物だった。

それを見てカミーユはおどおどとした顔で料理を用意したアルフォンスにこう言う。

「なんかこれだと食べるのに時間かかっちゃいそう……」

するとアルフォンスは笑顔を浮かべて、カミーユを椅子に座らせながら答える。

「まだ作業序盤なんだから、今の内から体力温存しないと完成間際でまた雑な食生活になるんだろ？」

それに、どうせカミーユ兄ちゃんは早食いなんだからこれくらい十分もあれば片付くだろうし」

「まあ、そうだけど……」

そんなやりとりをしながらも三人とも席に着き、お祈りをしてから料理に手を付ける。

アルフォンスが言っていた通り、カミーユはどこにそんなに入っていくのかと言うほど瞬く間にスープを飲み干し、バゲットを口の中に詰め込んで飲み込む。

第二人の倍のスピードで食事を済ませたカミーユは、そそくさと手を拭いて作業場へと戻って行った。

それからおよそ一ヶ月。カミーユはアヴェントゥリーナから依頼されていたドレスをおおかた形になる所まで縫い進めていた。

後は刺繍を入れていく訳なのだが、刺繍に手を付ける前にアヴェントゥリーナが店を訪れてきてギュスターヴにこう尋ねた。

「ねえギュスターヴ君。

カミーユ君ってばまた無理してたりしない？」

「してるんですけど、仕事は早めに片付けたい質らしくて、下手に休ませると逆に調子崩しちゃうんですよ。」

だからなるべく兄貴のペースでやって貰うようにしてます」

「あらあら。」

そう言えばうちの子も作業する時、根詰めちゃうタイプなのよね。

なんかカミュー君も他人とは思えないわ」

そんな会話を二人でしていると、作業をしていたそのままなのか、少し服に糸くずを付けたカミューが、作業場からひよこつと顔を出してアヴェントゥリーナに声をかけた。

「アヴェントゥリーナ様、ご依頼の品なのですが、刺繍を入れる前に一旦試着して戴いて宜しいですか？」

「あらまあ、もうそんな所まで進んだの？」

驚きと心配を隠せない様子のアヴェントゥリーナを採寸用の部屋へと通し、刺繍をまだ入れていないドレスの試着をして貰うカミュー。

刺繍を入れてからで無いと縫製できない部分があったのでそこはまだピンで留めているだけだったのだが、どうやらドレスの形自体はアヴェントゥリーナの理想通りに出来上がっていたらしく、甚く満足そうな反応が帰ってくる。

「後は刺繍を入れたら完成ですね」

「仕事が早いのはこっちとしては嬉しいんだけど、カミュー君は余り無理しちゃ駄目よ。」

早くても三ヶ月かかるって言ってたドレスをまさか一ヶ月で形にする

とか、結構無理してるでしょ？」

「いえ、別に無理をしているつもりは無いのですが……」

アヴェントゥリーナに心配されながらも試着は終わり、どの位置にどれくらい刺繍を入れるかの要望を訊く。

なかなか大きい刺繍になりそうなので、これは本当にあと二ヶ月は掛かるなど、カミーユはぼんやりと思いを巡らせた。

結局その後、ドレスの刺繍は一週間程で刺し終わり、ギュスターヴに託してアヴェントゥリーナの元へと届けて貰った。

アヴェントゥリーナとしても、何度かカミーユにドレスの依頼をしているので、丁寧な仕上がりの割に極端に短い納期でドレスを作ってくるのは解っては居たのだが、やはり毎回驚きを隠せない。

「カミーユ君、また次のお仕事入っちゃったかしら？」

「兄貴の仕事ですか？」

そうですね、一旦抱えていた仕事が付いたんで、次の依頼が来るまでは休ませます」

ギュスターヴからカミーユによく休みがやってきた事を聞いた

アヴェントゥリーナは、一旦ドレスの代金を渡してから、笑顔を向けてこう言う。

「あらそう。」

そう言えばカミーユ君、詩集とか童話とか好きだったわよね？

お休みの日に読めるように、何冊か分けてあげるわ」

「えっ？ 宜しいのですか？」

「もう何度も読んだ古本だけど、それで良ければあげるわ。」

本が増え過ぎちゃって引き取り手が欲しいのよ」

「あ、そう言う事でしたら有り難く戴きます」

ギュスターヴの返答に、アヴェントゥリーナはいそいそと自室へと向かう。

そして暫く待っていると数冊の本を持って戻ってきた。

「はいこれ。カミーユ君によろしくね」

「有り難うございます。兄貴も喜びますよ」

和やかにやりとりをした後、ギュスターヴは代金と本を抱えて家路についた。

ギユスターヴが家に戻ると、居間でカミーユがもこもことクロワッサンにレタスとピクルス、それにアボカドを挟んだものを囓っていた。

カミーユは仕事が詰まっている時は余り食事を自発的に食べないのだが、仕事が一段落するといつでも空腹感があるらしく、こうやって時間を問わずに食事をしている事が多々有る。

その度にアルフォンスは、カミーユが食べる料理の指導をする訳なのだが、カミーユはアルフォンスが用意する料理を黙々と食べるのだ。

カミーユがクロワッサンサンドを三個程食べ終わった所で、ギユスターヴが今回の依頼の報酬と、預かってきた本を渡す。

「わあ、こう言う本欲しかったんだよね。」

アヴェントゥリーナ様にお礼はした？」

「勿論よ。兄貴も今度会った時にお礼しろよ」

「うん」

好物のイチジクを出された時にくらいしか見せないような、至極嬉しそうで満足そうな笑顔を浮かべるカミーユを見て、ギユスターヴは、そう言えば昔、本当に小さかった頃、カミーユは眠る時に両親から聞かされた作り話の続きを考えるのが好きだったなと、少し懐かしさを感じ

じた。

ギユスターヴが感慨にふけていると、ふと、カミューが報酬の中身を見てこう呟いた。

「これから少しずつ、ミシン貯金しようかな……」

その呟きが聞こえていないであろうギユスターヴを置いたまま貯蓄の目標を自分の中で作ったカミューも、老後の貯蓄と生活費、それから自分のお小遣いを選び分けて、いつかミシンを言うと言う夢を膨らませたのだった。